



り付けたとしても数分間放置されてしまいます。この時間が長くなると救命率は低くなります。そこでわれわれがランナーと一緒に走りながら周囲を見ているのです。

今回の東京マラソンでは、日比谷からゴールまでの三十キロほどを四十人の医師が決められたペースで走っていました(写真)。以前、タレントさんが心停止して話題になりましたが、今回も一般ランナーが二人倒れ、無事に蘇生されたんですよ。最近では市民マラソンも増え、このよう

な活動も重要視されるようになってきました。ちなみに「ランニングドクター」という名前は認定制度で、ある一

定基準をクリアした人が名乗ることができません。僕もその一人です。

連携？連絡？

僕たちは訪問診療の中で口から食べることを取り戻す活動をしています。病院から「口からは食べられない！」と断言された方たちが何人も食べられるようになっていきますし、食の楽しみを回復した方もいます。

これは、僕だけ頑張ったわけではなく、歯科衛生士、管理栄養士をはじめ多くの医療、介護職との連携があったからこそできることです。

この「連携」という言葉は最近、医療、介護の世界で多く使われていますが、全然理解されていないことも多くあります。

各職種にはそれぞれの技能、知識があり、その道のプロフェッショナルです。そのプロたちが手を取り合うことを「連携」と言います。しかし、残念ながら自分の仕事すらプロフェッショナルにできない人たちが、それを他の職種に補ってもらおうとするようなグループを作ろうとする集団があります。これを連携とは言いません。単なる連絡網。

成果を出せるのはもちろん連携だけです。新宿には食をめぐる多職種連携があります。医師、看護師、ケアマネ、ホームヘルパーなど地域のプロフェッショナル軍団です。そしてもちろんしっかり結果を残しています。僕たちのモットーである「最期まで口から食べられる街、新宿」はすでに絵空事ではなくなっています。